

MotoGP 日本グランプリ 競技監督が 23 年の節目に交代

ー 高谷克実氏がつないできた、モータースポーツを支えるオフィシャルの力 ー

2026 年 10 月 2 日（金）より開催される FIM 世界ロードレース選手権 MotoGP 日本グランプリにおいて、競技運営のリーダーを担う「競技監督」を 2004 年より 23 年間にわたり務めてきたボランティアオフィシャルの高谷克実氏が、後進へバトンを渡すこととなりました。

MotoGP は、国際モーターサイクリズム連盟（FIM）が統括し、1949 年に始まった二輪ロードレースの世界最高峰です。2026 年は世界 18 ヶ国 22 サーキットで開催され、日本グランプリは国内唯一の大会として、栃木県のモビリティリゾートもてぎで開催されます。その競技運営には、多くのボランティアオフィシャルが関わり、華やかなレースの舞台を支えています。

MotoGP 日本グランプリでは、金曜日のフリー走行から日曜日の決勝後までの 3 日間、延べ 1,300 名のオフィシャルが車検・コース・救急・進行・管制等の各現場に配置され、公平・公正・安全なレース運営を担っています。



2025 年 MotoGP コースインスペクションの様子

高谷氏は、国内四輪モータースポーツにおいても競技長として長年にわたり競技運営を担ってきたほか、2014 年からはスーパー耐久のスーパーバイザーとしてシリーズの発展に携わってきました。現在は同シリーズを運営するスーパー耐久未来機構の理事を務めながら、二輪・四輪の垣根を越えて、日本のモータースポーツ界の発展に尽力しています。

今回の交代を一つの節目として後進へバトンを渡し、今後は国内モータースポーツのさらなる発展と社会的地位の向上に向けて、より一層力を注いでいきたいとの意向です。



ボードチェックの様子（中央が高谷氏）

■一般財団法人日本モーターサイクルスポーツ協会（MFJ）からの声明

MotoGP 日本グランプリの競技監督を長年にわたり務め、毎大会延べ 1,300 名のオフィシャルとともに公平・公正かつ安全な大会運営を支えてこられた高谷克実氏の退任にあたり、MFJ は深い敬意と感謝を表します。

振り返れば、高谷氏が競技監督に就任した 2004 年、MotoGP 日本グランプリでは玉田誠選手が優勝を飾りました。以来、日本人ライダーによる最高峰クラスの勝利は途絶えていましたが、退任の年となる今年、小椋藍選手がオランダグランプリで 22 年ぶりの優勝を成し遂げました。高谷氏の競技監督としての歩みは、日本人ライダーの勝利で始まり、再び日本人ライダーの勝利で締めくくられることとなりました。

高谷氏は日本のモータースポーツにおける稀有な架け橋であり続けました。四輪の競技長として、またスーパー耐久のスーパーバイザーとして四輪の発展に尽くす一方で、二輪の世界最高峰である日本グランプリの競技監督を務めてこられました。二つの現場を知り、双方の立場から語ることができる人材は、日本では他に例を見ません。

高谷氏が身をもって示してこられた二輪・四輪という垣根を越える姿勢は、日本のモータースポーツ全体の発展と社会的地位の向上を考えるうえで、私たちがこれから受け継ぐべき大切な財産です。昨年設立された日本自動車会議所のモータースポーツ委員会の一員として、高谷氏が二輪・四輪双方の現場経験を携え、業界全体の改善に取り組もうとされていることを、MFJ は心強く受け止めています。

小椋選手の勝利が示したように、日本のモータースポーツにはなお大きな可能性が広がっています。二輪の統括団体である MFJ は、その未来に向けて、鈴木隆幸次期競技監督への継承を確かなものとし、関係する団体や仲間とも力を合わせながら、モータースポーツの発展に尽くしてまいります。

高谷克実氏の 23 年にわたるご尽力に対し感謝状を贈呈するとともに、今後のさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

■MotoGP 日本グランプリ 競技監督 高谷克実氏からのコメント

生業ではないにもかかわらず、オフィシャルとして 23 年間にわたり競技監督を続けてこられたのは、毎年温かくサポートしていただいた MotoGP レースディレクションのメンバーとモータースポーツを愛するオフィシャル仲間のおかげです。これまで現場で私を支えてくださったすべてのオフィシャルの皆様により感謝申し上げます。そして、大会に足を運んでくださるファンの皆様にも、この場を借りてお礼申し上げます。

オートポリス黎明期のスタッフから始まり 38 年間に渡りモータースポーツに関わって参りました。二輪、四輪のオフィシャル現場経験者として、昨年設立された日本自動車会議所のモータースポーツ委員会メンバーとさせていただいた今、オフィシャルの現場では何が困っているのか、改善すべき事は何かをモータースポーツ委員会と共有し国内モータースポーツの発展に向け改革をしていくことが私に出来る責務だと考えています。

今年も日本グランプリには、多くのお客様が観戦のために来場されることと思います。

モータースポーツには、観客席からレースを楽しむだけでなく、コースの内側に入り、自らもレース運営に参加し、支える側として楽しむというスタイルもあります。

平日はそれぞれの仕事に全力を尽くし、週末は気の合う仲間とともにオフィシャルとして活動する。憧れのマシンやレーサーの気迫、真剣さを間近に感じ、ひとつのレースを成立させる役割を担うことは体験してみないと理解できない、やりがいと喜びがあると思います。コースサイドで旗を振ったり現場で走り回ることから経験を積み重ねセクションリーダーとなり、コントロールタワーでの役務へのステップアップし、役割のボタンを引き継いでいくことが必要です。また、オフィシャルの育成がモータースポーツ文化を未来へ継承する希望となると信じています。

ぜひ多くの皆様に、「オフィシャル」という参加型サポーターとして、モータースポーツを支え、仲間とともに楽しむ一歩を踏み出していただけたら大変うれしく思います。

その経験が、皆様の人生の大切な 1 ページとなり、そこからまた新しい仲間や次の世代へとモータースポーツの楽しさがつながっていくことを願っています。

オフィシャルの活躍の場は多岐にわたります。年齢の幅や性別を問わず自分のスキルを生かしながら活躍できます。皆様とともに、モータースポーツを「観る」だけでなく、「参加し、支え、ともに楽しむ」文化を、これからも創っていきましたら幸いです。

MotoGP 日本グランプリについて、来年から競技監督を引き継ぐ鈴木隆幸氏は 23 年間に渡り副競技監督として私を支えてくれた信頼できる優秀な人物です。語学が堪能であり、冷静で判断力にも長けています。これからの活躍にご期待ください。そしてその次の世代も育っています。彼等がオフィシャルとして続けたい、続けられると思える環境の改革が今まで携わったモータースポーツ界への私の恩返しだと思っています。

